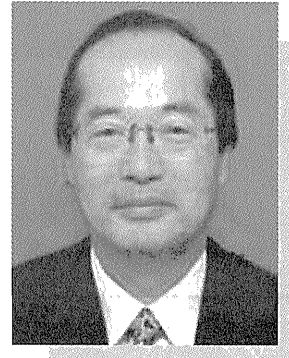


巻頭言

リスクアセスメントと災害の未然防止

向 殿 政 男



リスクアセスメント ■□□

リスクアセスメントという言葉が、やっと我が国でも一般的に言われたり、聞かれたりするようになって来た。建設や労働の現場でも常識的な用語になり始めたようである。事実、例えば機械安全に関する国際安全規格では、リスクアセスメントをすることが大前提となっている。リスクアセスメントはすべての安全確保の始まりであると考えてのが常識となって来つつある。厚生労働省が出している機械の包括的な安全基準の指針でも、リスクアセスメントの手順について詳しく述べられている。労働安全衛生マネジメントシステムでも、リスクアセスメントが必須になっている。しかし、それでは、リスクアセスメントとは何で、実際にどのようにやるのか、その意義は、となると残念ながら、我が国では現段階でそれほど浸透しているとは思えない。

リスクアセスメントとは、簡単に言ってしまうと、前もって危険性（リスク）の高いところをすべて見つけ出しておき、その危険性の大きさに対応して、事前に安全装置など安全対策の手を打っておくということである。それを、統一的に、網羅的に、合理的に、科学的にやろうと言うものである。災害の未然防止の科学的対処法ということが出来る。

危険なところを前もって予測しておき、先回りして手を打っておくのは当たり前のような話であるが、我が国の実際の災害や事故を見ると、起きてから手打つという事後対策が実に多い。起きるまでは、安全と考えている。被害者が出てから、対策を施す場合が多い。危険性に気が付いていても、これまで事故や災害が起きなかったし、注意をしているから、安全である、と考えがちである。これまで事故や災害が起きなかったから安全であるというのと、危険性のあるところには前以て手が打ってあるという安全では、安全のレベルが違う。現代の国際安全の常識から言うと、後者のように未然防止のための事前対策の手が打ってある時、はじめて安全であるという。前者をもって安全であるとはいってはいけないのである。

リスクと安全 □■□

それでは、何をもちいて安全であるとするのであろう

か。「受け入れることが出来ないリスクが存在しないこと」、これが現代の安全の定義である。ここでリスクとは、危険性の程度のこと、被害の大きさとそれが起きる確率とを考慮して決められる。一般に、設計した装置やシステムには、取巻く環境も考慮して、危ないところ（ハザード：危険源）が多数ある。すべての危険源に対して、そのリスクの大きさを見積もり、危ないと判断したら前もって、安全対策を施す。その結果、すべての危険源に対して、メリットやコスト等を考慮して、そのリスクを受け入れることが出来ると判断した時、はじめて安全である、と言う。ここでは、絶対安全は存在しないことを宣言している。安全であるといっても、常にリスクは残っていることを明言している。従って、使用者は、それから得られるメリット等を考えて、敢えてそのリスクを受け入れて利用しているという自覚が必要である。

未然防止と主体的活動 □□■

リスクアセスメントは、これまで漠然とやっていた災害の未然防止活動とは、根本的に異なったところがある。すべての危険源を前もって見出しおき、そのリスクをどのように見積もり、それぞれどのような対策を施したかを文書化しておくからである。神ならぬ人間に見落とししたり、想定外の危険源が災害を引き起こす可能性がある。その時、この文書は、災害対策に対する説明責任という役割を果たす。一方で、その災害原因を、改めて危険源のリストに追加することが出来る。更に、何をもちいて安全とするか、すなわち、何をもちいて受け入れ可能なリスクと判断するかは、施設、設備、システム、機械ごとに異なるが、そこでの合意を取るという行為により、関係者の安全への参加意識を高めることが出来る。そして、現場からの「ひやり、ハット、気がかり」等の情報を取り込むことで、危険源リストを更に充実させることが出来る。リスクアセスメントには、安全確保の継続的な自主的活動が組み込まれている。ここにリスクアセスメントのもう一つの意義がある。